

日本が、朝鮮を侵略し、中国を侵略し、全アジアに侵略の手をのびして行った中で、朝鮮人はどう闘い、中国人はどう闘ったのか、……「片隅の小さなこど」のようにみえる闘いをもふくめて見直して見ること。そして、同時に、日本人はどう闘っていたのか、侵略を食い止めようとする努力があったのか、なかったのか、あったとすればそれをますます伸ばさねばならぬ

●テキスト 寺尾五郎ほか『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』

第二講 日・朝・中人民の闘いの歴史

(日本朝鮮研究所、1964年)

日時 **5月31日** 場所 **葛飾区立堀切地区センター 葛蒲の間**
 (日曜)午後1時15分～5時 京成本線「堀切葛蒲園」駅徒歩4分、葛飾区堀切3-8-5

- 13:15～13:45 報告(前田年昭) 第一講(補足)
- 13:45～14:45 報告(岡崎耕史) 第二講 一～四 (休憩10分)
- 14:55～15:55 報告(須田光照) 第二講 五～七
- 15:55～17:00 総括討議



参加費 **ひとり500円**(要予約)

主催(予約) 前田年昭 電話 080-5075-6869 メール tmaeda1966516@gmail.com
 ○参加希望の方は事前にお申し込みください(電話・メール)。テキストが入手できない方はご連絡ください。
 ○当日は報告者の提起と感想や意見の交流、討議を行います。あらかじめ対象テキストを読んできてください。

支配者は、排外主義をふりまき、民衆同士の対立と分裂を煽っている。同僚や隣人までが朝鮮や中国へのヘイトをまき散らす現状はとても耐えがたい。なぜ労働者同士がいがみあわなくてはならないのか。私たちは同じ釜の飯を食う仲間であるはずであり、ひとつの階級である。労働者に国境はない。しかしまた、私たちにそれは可能か。

日本はかつて朝鮮・中国の民衆の土地を奪い、米を奪い、言葉奪い、命を奪った。日本の労働者が朝鮮・中国の労働者と手をつなぎたいと思うなら、まずは侵略と加害の歴史を自分たちのものにする必要がある。

日本は1965年、日韓条約を結んだ。これは米日韓台軍事同盟であり、日本の労働者にとっては朝鮮・中国の労働者と分断され、仲を永遠に引き裂かれることを意味した。本書は、これに対する反対運動のなかで書かれたものである。

私たちは本書から、①日本の朝鮮侵略史、②日本の侵略に対する朝鮮人民の抵抗の闘い、③呼応した日本人民の闘い——について、読み、学び、話し合いたい。多くの仲間の皆さんの参加を呼びかける。

「日・朝・中人民の闘いの歴史」年表(本書133ページ)

ヨーロッパ	中国	朝鮮	日本
		8.23 日韓併合	6.1 大逆事件 <small>明治43</small>
	1. 中華民国成る		<small>44</small>
			<small>大正1</small>
			2
			3
			4 大正デモクラシー運動はじまる
			5
	11. ロシア大革命		6
			7
	5.4 五四運動	4. 沿海州バルチザン 10. 延辺バルチザン總城進出 2. 鳳梧洞の戦い 10. 瑯春日本領事館・竜泉嶺戦	8. 米騒動おこる
	7.1 中共創立	3.1 三一人民蜂起	7
			8
			9
			10
			11 7. 日共創立
			12 9.1 関東大震災
			13
	5. 五・三〇事件	4. 朝共創立	4.22 治安維持法公布
	10. 井岡山		14 <small>昭和1</small>
			2
			3 3.15 三・一五事件
			4
	10. アメリカ大恐慌	1. 元山スト 11. 光州学生闘争	11. 反帝同盟
			5 農村恐慌
			6 9.18 満州事変はじまる
			7
	3.1 満洲国		
1. ヒットラー政権をとる	9. 上海反戦大会 <small>抗日連帯20万</small> 10. 長征開始 8. 中共抗日宣言 10. 長征完了	4. 金日成 革命軍を組織	
			8
			9
			10
5. フランス人民戦線勝利	5. 金日成 祖国光復会を組織		11 2.26 二・二六事件
	8. 八路軍編成 10. 平型関勝利	6. 普天堡の戦い	
			12
			13
			14
			15
	2. 楊靖宇戦死		12. 創氏改名 9. 日独伊三国同盟
			16 12.8 太平洋戦争はじまる
	延安に日本人反戦連盟	8. 小部隊闘争へ転換	徴兵令
			17
			18
			19
			20

橋をわがものにするという

キム・ヨニル

フアノンの思想は、被抑圧者が胸を張って生きていくためのものである。生まれた時から日帝本国に暮らし、日本語しか話せず、自分の出自を呪い、民族解放の歴史を発見し、さりとて同胞との接点はなく……このような軌跡はありふれている。

私は、フアノンが照らした被抑圧者の実存と主体化のプロセスに強く惹きつけられたが、討議ではフアノンが登場した1960年頃はいわば「アフリカの時代」であったにもかかわらず、反革命の跋扈を許してしまつたのはイデオロギーの欠如があつたからではないか、という、リム・ユ Cholさんが講演で言及したアミルカル・カブラルの指摘を覚えてもら

報告をきいて

骨がらみの排外主義克服は自己解放のため

須田光照

日本人労働者が朝鮮人労働者を虐殺した矢作事件と本質的に変わらない出来事は報告にあつたとおり現在も「何十億回となく」出くわしている。

先日も駅頭で労働組合の情宣中に「税金を払っていない外国人は出ていけ」と絡んでくる男に出くわした。SNSで朝鮮学校について記述すると「反日教育やめる」「日本人が優先だ」といったコメントがつかつた。実生活でもこの人がこんなことを言うのかと驚かされる場面が増えた。こうした現実から分析を始めるべきとの意見に賛成だ。

つた。確かに、民族内部の分岐、つまり民族ブルジョワジーを正しく排撃できるのは、社会革命という思想的枠組みがあつてはじめて可能だ。人は文化を出発点として民族を証明するのではない。民族文化とは、民衆の真実がそこにあるとされる民間伝承ではない。例えば、集会でお約束のように披露される朝鮮舞踊について、外在的な記号として消費されていくように苦々しく感じる瞬間があるはずだ。少なくとも私はある。

民族の本質なるものが与件としてあるのではない。民族解放闘争こそが、社会の均衡を揺さぶるのであり、人間が新しく生まれ変わる文化的契機なのだ。橋をわがものにする、とはそういうことだ。



함께 共に

高市が選挙で「圧勝」してからパンドラの箱を開けたかのように排外主義が身近に迫っていると感じていたが、日韓条約制定時の左派を含めた骨がらみの植民地主義を踏まえれば戦後もずっと閉じられていなかつた箱がますます堂々と全開しつつかつたのだらう。

外国人排斥の空気が強まるなかで気がかりなことがある。パキスタン国籍の仲間が日本に帰化申請したいと言いだした。これは「日本人」になれば安心して生活できるからだという。報告にあつたフアノンは白人への同化でもなく黒人文化の優越を誇るネグリチユードでもなく「全的人間」という高次の普遍をめざしたが、そうした思想の発展を阻害しているようで心が痛い。いや、それは植民地主義を克服できずにいる日本の労働者人民こそが「部分的人間」

日韓条約は米日韓反共軍事同盟への地ならし

前田年昭

私の報告は「日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論」の第一講「日本の朝鮮侵略史」。内容にはいる前に、この本が書かれざるを得なかつた必要としての日韓条約反対闘争について時間をとつた。宗主国と植民地との手打ちを必要としていたのはアメリカであり、アメリカが求めていたのは米日韓の軍事同盟だったのである。ここで日本帝国主義の自立従属論争の、各自の持論を述べあう論議になつてしまつた。これは、寺尾五郎の主張が報告者である私の持論に近かつたことから調子に乗つて脱線したことが原因で、申し訳なく思う。

キモは、当時、中国と朝鮮の党は日韓条約を日本軍国主義の復活の目印として糾し、これに対して日本共産

党が日本軍国主義は復活していないと応答、これに対する批判として構成派などの「自立帝國主義論」や寺尾五郎・井上清らの「従属帝國主義論」があつた——というところにある。戦前の日本資本主義論争を引き継いだものでもあつた。寺尾五郎個人の党除名にかかわることとして自立従属論争を採り上げたことは、二重の誤りだつた。

第一講「日本の朝鮮侵略史」では、植民地支配はいいこともやつたという近代化論に対して、本書は、誰のためのものかという問いを貫くことで、日帝支配の反人民性を浮き彫りにした批判をなし得て、明快である。今後、読書会を、互いの持論を主張しあう場などではなく、あくまで対象テキストと向き合い、「持論」も含む）自分自身のものの見方、考え方を再点検し、学んでいく場としたい。自戒を込めて。これについては、次回冒頭に補足報告する。 ☆

に墮したままであることを意味しているのだ。日本人民として日本人民の解放のために「日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論」を引き続き読んでいきたい。 ☆

植民地主義を空きっ腹で理解したい

田代ゆき

過日テレビで、中国人の学生に対し「あれは侵略だと思つてるの？」うちら日本人側は思つてない」と澁淵と語る日本人高校生の姿を目にしたとき（1月25日E.T.V特集）、ここまで墮ちたかと日本の教育を恨んだが、思えば「日本の近代化の過程こそアジア諸国の模範」（ライシヤワ

）との認識はずつと以前から私た

間島バルチザンの歌（抄）

榎村 浩

お、蔑すまれ、不具にまで傷つけられた民族の誇りと声なき無数の苦悩を載せる故国の土地！

そのお前の土を 飢えたお前の子らが 若い屈辱と怨念をこめて嘸み下すとき——

お前の暖い胸から無理強ひにもぎ取られたお前の子らが うなだれ、押し黙つて国境を越えて 行くとき——

お、山から山、谷から谷に溢れ出た 虐げられたものらの無数の列よ！ 先頭に旗をかざして進む若者と 胸一ぱいに万才をはるかの屋根に呼び交はす老人と

眼に涙を浮かべて古い民衆の謡をうたふ女らと 草の根を齧りながら、腹の底からの嬉しさに歓呼の声を振りしぼる少年たち！

緒土の崩れる峠の上で 声を漉らして父母と姉弟が叫びながら、こみ上げてくる熱いものに我知らず流した涙を おれは決して忘れない！

お、おれたちの自由の歓びはあまりにも短かつた！ 夕暮おれは地平の涯に 煙を揚げて突き進んでくる黒い塊を見た 悪魔のやうに炬火を投げ、村々を焔の×に浸しながら、喊声をあげて突貫する日本騎馬隊を！ だが×××れる部落の家々も 丘から丘に搾裂する銃弾の音も、おれたちにとって何であらう おれたちは威鏡の男と女 搾取者への反抗に歴史を×××たこの 故郷の名にかけて 全韓に狼煙を揚げたいくたびかの蜂起に×××を滴らせたこの故郷の土にかけて 首うなだれ、おめくと陣地を敵に渡せようか

（榎村浩全集）平凡堂書店（一九八四）